
クラシック鑑賞記～コンサートホールへ行こう！

—◆—演奏会情報—◆—

2012. 7. 20（金） 大阪交響楽団第 168 回定期演奏会

（会 場） 大阪 ザ・シンフォニーホール

（曲 目） [1] バルトーク・ベラ ルーマニア舞曲から第 1 曲
[2] パウル・ヒンデミット ヴァイオリン協奏曲 ※
[3] モデスト・ムスルグスキー 組曲「展覧会の絵」

（指 揮） キンボー・イシイ・エトウ

（管弦楽） 大阪交響楽団

※（ヴァイオリン） 山下 洋一

—◆—鑑賞記—◆—

[はじめに]

このところ、コンサートと言え、もっぱら大阪交響楽団の定期演奏会だけになっているが、近年、あまり聞いたことの無い作品を良く取り上げているので、「未知との遭遇」というか、少し楽しみにしている部分もある。

今夜は、首席客演指揮者のキンボー・イシイ・エトウ氏による「意外？案外！展覧会」と題した演奏会の模様をお届けしたい。

[1] バルトーク・ベラ ルーマニア舞曲から第 1 曲

ハンガリー領出身の音楽家であるバルトークの作品。バルトークと言え、**「幻想交響曲」**が有名だが、その他にも素晴らしい作品をたくさん残している。ルーマニア舞曲もその一つだが、こちらの第 1 曲は、あまり演奏さないのではないだろうか。

バルトークらしい民族的なメロディーが全体を貫いている作品だが、日本の音楽にも通じる何か魅力を味わうことができる。

[2] パウル・ヒンデミット ヴァイオリン協奏曲

続いて演奏されたのは、ドイツの作曲家・ヒンデミットの作品。こちらも初めて聴く作品だ。

ヴァイオリンは、現在、ドイツのオーケストラの首席を務める山下洋一氏。

ヒンデミットと言えば、やはり現代曲という印象をぬぐえないが、この曲もそうだった。ヒンデミットの描いた宇宙観のようなものが、一つ一つの音から伝わってくるというか、その広がりや凄さと思う。大きな音がただぶつかりあっているだけでなく、そこに世界を作り出していると言えはいいのだろうか。実に、興味深い。多くの現代曲は、ただそこに音があふれているだけのようだが、ヒンデミットはそうではないのだ。

ヴァイオリンの山下は、素晴らしい技術の持ち主で、聴衆をひきつけていた。いつもなら、途中で飽きかき、会場の雰囲気やそれが現れるのだが、シーンと静まり返った会場の空気が、それを物語っていた。少し雑に聴こえる部分もあったが、おおむねバランスの良い演奏で、とくに終楽章のカデンツォは、聴きごたえがあった。

オルガン席が設定された影響か、今日のイシイ氏の指揮は、いつも以上に熱が入っていた。

[3] モデスト・ムソルグスキー 組曲「展覧会の絵」

最後は、ムソルグスキーの「展覧会の絵」だ。この曲は、良く演奏されるが、恐らく生で聴くのは初めてだったのではないと思う。

ちなみに、ムソルグスキーは、ピアノ曲としてこの作品を作曲したが、ボストン交響楽団の依頼を受け、ラヴェルが編曲したことで一躍、オーケストラ曲として人気を得ることとなる。多くの演奏会で、このラヴェル版が用いられているが、今回、大阪交響楽団は、ウラディミール・アシュケナージ（前NHK交響楽団音楽監督）による編曲版で演奏したのだ。

アシュケナージは、指揮者としても有名だが、何とんでもピアニストとして名声を極めただけに、どんな編曲かが楽しみの一つでもあった。

文字でメロディーを表せないのが残念だが、インターネットなどで「展覧会の絵」と検索して、ユーチューブなどで聴いてもらえばすぐわかるが、あの有名なメロディーが冒頭奏でられる。確かに、良く聴くものと比べ深みがあった。それは、後で分かったのだが、このメロディーを通常は、トランペット2本で吹かせるのを、3本で吹かせていたためだ。なるほど、しかしながら、やはりこの曲を象徴するメロディーだけに、より印象的を与えるためにも、こちらの方が適切かもしれない。わたしは、とても気に入った。ピアニスト・アシュケナージが、ピアノ曲としての「展覧会の絵」に精通していたからこそ、なし得た編曲かもしれない。このメロディーが、間奏曲的に所々で提示されながら、曲は進む。

余談だが、大阪のザ・シンフォニーホールは、クラシック音楽専用ホールとして建てられ、その残響の素晴らしさは、日本有数、いや世界有数かもしれない。クラシック音楽の醍醐味は、残響にあると言っても過言ではない。わたしは、そう思っている。だから、CDやレコードで聴くのと、ナマで聴くのとでは、聴こえ方が違うのだろう。

本題に戻すと、この「展覧会の絵」（アシュケナージ編曲版）は、その残響の配分というか、そこまで計算して編曲していたとするならば、アシュケナージは天才かも知れない。そう思うほど、素晴らしかった。大阪交響楽団の巧みな技術に支えられた部分もあったのだろうが、演奏そのものに加え、ホールと音楽の関係についても、垣間見ることができ、とても楽しかった。